都市の中での〝村おこし〟
―緑区・寺家町―

都市化の波の中で

横浜市の北のはずれ、川崎市と町田市に隣接した田園風景のなかに広がる緑区・寺家町。町というよりは、昔ながらの村というたたずまいを残している。茅ぶきの家がのこり、庭ではチャボが餌をついばむ。都市にありながら、「ふるさと」といえる自然がのこるこの地域では、今、新しい地域づくりが着々と進められている。

緑区といえば、多摩田園都市、港北ニュータウンに代表されるように、開発がさかんに行われている地域でもある。次つぎと誕生する新興住宅地、年ごとに増え続ける人口、次から次へとこわされる自然環境。周辺の目覚ましい変貌が、じょじょに寺家の農業の存続をむずかしいものにしてきたことは言うまでもない。すぐ隣までせまってきた都市化の波のなかで、どんな地域づくりを進めればよいのか。今までどおり先祖代々の土地をまもり、農業を続けていくべきか、それとも農業を捨て、都市化を推進すべきか。まさに、寺家はその地域のあり方をとわれたのである。

都市の中での〝村おこし〟

そこで寺家では、農業存続か、都市化か、今後の村のあり方について何回となく話しあいが行われた。しかし、そのなかで意見はそれぞれ違っても、ただひとつ共通していたもの、それは「自然は一度破壊すると、二度と元には戻らない」という思いであった。周辺の開発を目のあたりにしてきた寺家の人びとにとって、この事実はからだで学んだ教訓であったのかもしれない。

では、どうしたらよいのか。時間を重ねて話しあいを重ねた結果、次の結論が生まれた。

都市化の波にただ巻きこまれるのではなく、それを取りこみ、積極的に農地や山林をのこしていこう。そのためには周囲と隔絶したかたちで農業だけを続けて行くのではなく、周囲にひらかれ、かつ農業にくわえてさまざまなものをもっている地域づくりをしていこう、という考え方である。

寺家ふるさと村では多彩な催しが行われている

つまり、観光農園などを行い農業に付加価値をくわえ、文化・スポーツ施設などを整備して地域住民との触れあいをもつ。そうして、外からの空気を取りいれながら、地域全体を活性化させ、また、人びとにとって「ふるさと」とよべる地域づくりを行おうと考えたのである。

この考えは、昨今地方のさまざまな地域で行われている、いわゆる〝むらおこし〟に通ずるものである。その意味では、寺家のこの試みは、まさに都市における〝むらおこし〟とよべるのではないだろうか。

着々と整う「ふるさと村」の施設

このような考え方にもとづいて計画された「ふるさと村」は、昭和56年の基本計画に始まり、現在までにさまざまな施設が整備された。

「郷土文化館」は、寺家の文化を多くの人に知ってもらおうとする施設で、りっぱな茶室が自慢だ。「陶芸舎」では陶芸教室が開かれ、好評をえている。「体験温室」ではトマト、メロン、イチゴなどが栽培され、即売も行われている。このほかにも「体験農園」「ふるさとの森」「運動広場（テニスコート）」「バーベキュー・柿の里」「釣り堀」などに、すでに多くの人びとが訪れている。

そして、もっとも新しく完成したのが、自然環境活用センター「四季の家」。ここでは、寺家の自然と農業と文化関係の展示、天然記念物

Town

ミヤコタナゴの飼育・展示を行っている。また、味噌づくりなどの〝手づくり体験〟ができるようにもなっている。

施設の完成にともなって、周辺の住民が次つぎと寺家へ。農家の畑を開放した体験農園で、日頃、土に触れる機会のない人びとが野菜づくりに精を出す。「ふるさとの森」の自然を満喫しながら、家族そろってのハイキングを楽しむ。あるいは、陶芸をとおして寺家の文化にふれたり、牧場で牛たちとたわむれたり。休日ともなるとあちらこちらから訪れる多くの人で、静かな村がにわかに活気が増す。

寺家という小さな村を舞台に広がる、農村の人びとと新しい住民、あるいは新住民同士のあたたかな触れあい。「ふるさと村」は、着実にその目的を実現しようとしているようだ。そしてさらに新住民の心のなかに、新しく移りすんだ土地への愛着と、寺家の貴重な自然と美しい緑をいつまでも残したいという思いを芽ばえさせてもいるようだ。

一つの文化づくり

「四季の家」館長の吉野清さんは、「ふるさと村」について、次のように語っている。

「なにしろ空気がよいし、自然がいっぱい。ここを訪れた方は、みなさんとても満足してくださいます。これからも、私たちが中心となった、村の文化や施設の紹介を積極的に行っていきたいですね。味噌づくりを学びたい、温泉はないのかなど、問い合わせも度たび、この村の暮らしを楽しもうというみなさんの気持ちが、ひしひしと感じられますね。それだけに私たちもやりがいがあります」

都市の人たちの願いをむらに反映していく。また、農村への理解を少しずつ高めていく。「ふるさと村」は新住民と農民が互いに歩みよりながら、ひとつの文化をつくっていく、そんな場なのだろう。

周囲と隔絶しがちな都市農業をあえて新住民に開放し、「新」「旧」のコミュニケーションをはかりながら新しい村づくりにのり出した寺家町。この選択の答えは意外と早く出るのかも知れない。

■寺家ふるさと村

寺家ふるさと村へは田園都市線青葉台駅よりバス「鴨志田団地」行にて終点下車
横浜ふるさと村自然と文化の会（1987年）作成